第一言語の物語文の発達過程における内容的特徴・言語的特徴の変化

Developmental Changes in Content and Linguistic Features in First-language Narratives

稲葉　みどり
Midori Inaba
愛知教育大学
Aichi University of Education
mdinaba@auecc.aichi-edu.ac.jp

概要

本研究では、3 歳から 11 歳、大人の発話資料を縦断的に分析し、言語発達や物語談話を構成する能力等について考察した。発話データは KH Coder 3 を用いてテキストマイニングにより解析し、物語文の使用語彙の変化、内容的特徴、言語的特徴に焦点を当てた。11 歳以降の発達の特徴として、情報を加えて描写を豊かにして話を面白くする工夫等、子どもの創造性の発達と物語を独自のものにしたいという希求が示唆された。

キーワード : 物語文、内容的特徴、言語的特徴、ナラティブ・スキル

1.　研究の目的と背景

本研究では、日本語を母語とする子どもが物語を構成する能力（ナラティブ・スキル）の発達過程を考察する。 一般に物語を構成する能力は 3 歳頃から発達し始め、9 歳頃には結束性と統括性を備えた物語文を語ることができるようになると言われている（Berman & Slobin , 1994; Stein & Albro, 1997; Heilmann et al., 2010）。先行研究（稲葉, 2017, 2020, 2021a, 2021b、2021c）でも、9 歳頃までには局所構造、全体構造が整うことを明らかにしている。そこで本研究では、物語文の内容的特徴と言語的特徴の発達変化に焦点を当て、3 歳から 11 歳、及び大人を含めた発話資料を縦断的に分析し、言語発達や物語談話を構成する能力等について考察する。

2.　研究の方法と研究課題

言語資料は、文字のない絵本 Frog, Where Are you ?（Mayer, 1969）を用いて収集した口頭の物語文である。物語の構成は、物語文法(Thorndyke, 1977)を基に考察の柱を設けた。参加者は 3 歳から 11 歳までの日本語母語話者の子ども(各年齢 10 人、合計 90 名)、及び、大人(10 人)である。物語文のテキストは、KH Coder 3(樋口, 2020)援用して解析した。発話データは、頻出語彙の抽出、関連語検索、KWIC コンコーダンスによる使用語の文脈の確認、対応分析等の検出を行った。研究課題は以下の点である。1）使用語の量的変化の分析 : 使用語（「段落数・文数」「総抽出語数・異なり語数」等）の年齢による推移と談話構成能力の発達過程の関わり、2）物語文の内容的特徴の分析 : 年齢別の特徴語(動詞)の分析、動詞の対応分析等から物語の内容的特徴の変化、3）言語的特徴の分析 : 発話の語彙や語り方の特徴等を探る。

3.　結果と考察

3.1　使用語彙の分析

使用語の量的変化の分析から、物語を語るのに必要なごく一般的な語、語彙の大部分は、5 歳頃にまでに出揃うことが分かった。よって、3～5 歳児では、語彙の発達は、物語の局所構造を構成する能力の発達と相まっていると考えられる。語数が急激に増加するのは、11 歳以降で、語彙等の増加の要因の一つとして、子どもは、局所構造と全体構造が整った物語文を構成できるようになると、物語を面白くしようとして、背景情報等を付け加えたり、話を膨らめたりすると考えられる。

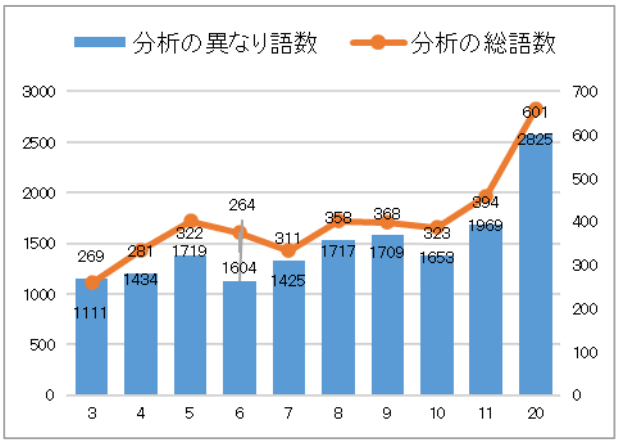

図 1. 分析の対象となる総語数・異なり語数の推移

3.2 物語文の内容的特徴の分析

物語文の内容的特徴の分析では、発達初期の 3〜4 歳頃には、物語の発端、展開の前半の部分に語りの中心があり、登場人物の個々の言動、行動に言及して話を構成していることが分かった。

5 歳頃になると、物語の展開の中盤の出来事に言及し、登場人物の心情なども織り込むようになることが分かった。これは、この時期の物語の局所構造を構成する能力の発達と相まっていると考えられる。6〜7 歳頃には、物語の展開からクライマックスの部分に言及し、8〜9 歳頃には、物語の結末まで全体を主題に沿って展開していることが示された。

これらの一連の発達の流れは、稲葉の先行研究における共起ネットワーク等の分析から得られた結果と概ね一致する。また、一般に物語を構成する能力は 3 歳頃から発達し始め、9 歳頃には高いレベルに達すると言う主張（Berman & Slobin, 1994 他）とも概ね一致する。

3.3 言語的特徴の分析

言語的特徴の分析では、「言う」「思う」「怒る」の 3 つの動詞の使われ方や文脈を KWIC コンコーダンスで確認した。その結果、言語表現は、発達初期の登場人物等の行動の絵描写的な説明から、次第に客観的な語り文へと変化していくことが示された。

さらに、年齢が上がると、物語を牽引する登場人物等の心理・思考・感情などにも言及し、出来事の因果関係等も表現するようになることが分かった。その後、20 歳に見られるような多様な言語表現へと近づくことが推察された。

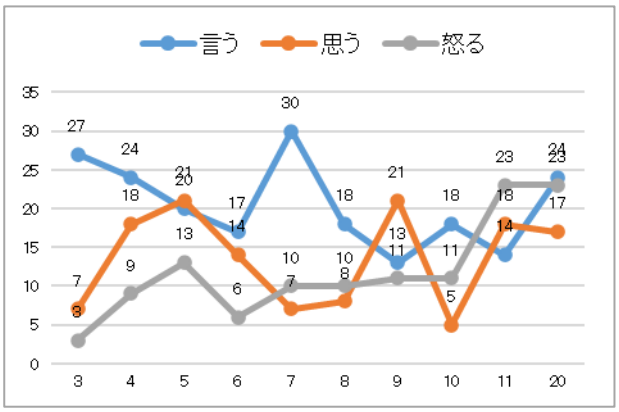

図 2.「言う・思う・怒る」の年齢別出現頻度

4. まとめと課題

本研究で得られた結果は、この日本語を母語とするこの物語文（Frog Story）について、明らかになった結果である。今後は、他のジャンルの物語文の発達や他の言語における発達過程の研究等を比較して、さらなる考察をすることが必要である。

謝 辞

本研究では、発話資料の収集、整理等で多くの方々のご協力を得ました。また、査読で有益な助言を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

樋口耕一(2020).『社会調査のための計量テキスト分析第2版』ナカニシヤ出版.

Berman R. & Slobin, D. I. (1994). Relating events in narrative: A crosslinguistic developmental study. Hillsdale, NJ: LEA Publishers.

Heilmann, J., Miller, J. F., Nockerts, A., & Dunaway, C. (2010). Properties of the narrative scoring scheme using narrative retells in young school-age children. American journal of speech-language pathology, 19(2), 154–166.

稲葉(2017).「日本語の物語文における言語知識の発達過程の考察—発話数・単語数・形態素数・平均発話長の解析—」『教科開発学論集.』5, pp. 23-32.

稲葉(2020). 「物語文の萌芽－3 歳児の Frog Story の分析から－」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』4, 91-98.

稲葉(2021a). 「物語文における 4 歳児・5 歳児の発達に見られる特徴－Frog Story の分析から－」『教科開発学論集』9, 23-32.

稲葉(2021b).「6 歳児・7 歳児の物語文の構造－共起ネットワークによる発達過渡期の特徴の分析」『愛知教育大学研究報告. 人文・社会科学編』70, 10-18.

稲葉(2021c).「物語談話を構成する能力の発達－8 歳児・9 歳児の Frog Story の分析から－」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』6, 61-68.

Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.

Stein, N. L., & Albro, E. R. (1997). Building complexity and coherence: Children's use of goal-structured knowledge in telling stories. In M. G. W. Bamberg (Ed.), *Narrative development: Six approaches* (pp.5-44). Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

Thorndyke, P. W. (1977). Cognitive structures in comprehension and memory of narrative discourse. *Cognitive Psychology*, *9*, 77-110.

田島啓子(2003).「物語能力の発達 ： 児童期から青年期にかけて何が発達するのか」『日本女子体育大学紀要』33, 91-99.